

繪本孝經略解

堀中徹藏

全

特60

406

009137-000-7

特60-406

繪本孝經略解

堀中徹藏 / 編

M16

AAE-0097





繪本孝經略解序

孔安國

孝經者何也孝者人之  
 高行經常也自有天地人民以來而  
 孝者著矣上者明王則  
 大化溥流充塞六合若其無也則斯  
 道滅息下 孟 及 普 當昔先君孔子之世周失其柄諸侯力  
 爭道德既隱禮誼又廢至乃臣弑其君子弑其父亂逆無紀  
 莫之能正是以夫子每於間居而歎述古之孝道也下 同 音  
 夫子敷先王之教於魯之洙泗門徒三千而達者七十有  
 二也貫首弟子顏回閔子騫冉伯牛仲弓性也至孝之自然  
 皆不待論而寤者也其餘則悱憤憤若存若亡教 音 殊 四  
 唯曾參躬行匹夫之孝而未達

度 音 反 悱 音 芳 匪 反 憤 音 房 粉 反 起



天子諸侯以下揚名顯親之事因侍坐而諮問焉故夫子告其誼於是曾子喟然知孝之為大也遂集而錄之名曰孝經與五經並行於世參所金反坐才逮乎六國學校衰廢及秦始皇焚書坑儒孝經由是絕而不傳也建大計反又代下同至漢興建元之初河間王得而獻之凡十八章文字多坑廣反誤博士頗以教授後魯共王使人壞夫子講堂於壁中石函得古文孝經二十二章載在竹牒其長尺有二寸字科斗形共音恭壞音怪牒徒協反長直亮反魯三老孔子惠抱詣京師獻之天子天子使金馬門待詔學士與博士羣儒從隸字寫之還子惠一通以一通賜所幸侍中霍光光甚好之言為口實呼報時王公貴人咸神祕焉比於禁方天下競欲求學莫能得者每使

者至魯輒以人事請索或好事者募以錢帛用相問遺魯吏有至帝都者無不齎持以為行路之資故古文孝經初出於孔子白反遺唯李反而今文十八章諸儒各任意巧說分為數家之誼淺學者以當六經其大車載不勝反云孔氏無古文孝經欲矇時人度其為說誣亦甚矣色主反勝音并吾愍其如此發憤精思為之訓傳悉載本文萬有餘言采以發經墨以起傳庶後學者覩正誼之有在也思慮反下皆同今中祕書皆以魯三老所獻古文為正河間王所上雖多誤然以先出之故諸國往往有之漢先帝發詔稱其辭者皆言傳曰其實今文孝經也上時昔吾逮從伏生論古文尚書誼時學士會云出叔孫氏之門自道知孝經有師法其說移風易



俗莫善於樂謂為天子用樂省萬邦之風以知其盛衰則移  
之以貞盛之教淫則移之以貞固之風皆以樂聲知之知則  
移之故云移風易俗莫善於樂也息又師曠云吾驟歌南  
風多死聲楚必無功卽其類也且曰庶民之愚安能識音而  
可以樂移之乎救任當時衆人僉以為善吾嫌其說迂然無  
以難之後推尋其意殊不得爾也且難乃子游為武城宰作絃  
歌以化民武城之下邑而猶化之以樂故傳曰夫樂以關山  
川之風以曜德於廣遠風德以廣之風物以聽之脩詩以詠  
之脩禮以節之又曰用之邦國焉用之鄉人焉此非唯天子  
用樂明矣夫音扶下同風德夫雲集而龍興虎嘯而風起物  
之相感有自然者不可謂毋也胡笳吟動馬蹀而悲黃老之

彈嬰兒起舞舞庶民之愚愈於胡馬與嬰兒也何為不可以樂  
化之徒音無經又云敬其父則子說敬其君則臣說而說  
者以為各自敬其為君父之道臣子乃說也余謂不然君雖  
不君臣不可以不臣父雖不父子不可以不子若君父不敬  
其為君父之道則臣子便可以忍之邪此說不通矣吾為傳  
皆弗之從焉也悅子說臣說乃說並音





繪本孝經略解

開宗明誼章第一

此章ハ孝の源を開き且つ仲尼間居曾子侍

坐仲尼と孔子のおん字あり門人の曾子かたろくに坐に

子曰參先王有至德要道以訓天

下民用和睦上下亡怨女知之乎

子とハ孔子をいふ也なり參とハ曾子へ云り孔子先世の王天徳

敏何足以知之乎

曾子承ハリ席を辟け慎んで礼儀を以て曰ふ

德之本也教之所繇生也復坐吾語女

子曰夫孝徳の源なり人の教へを生ず

身體髮膚受之父母不敢毀傷孝之始

子ひけるハ夫れ孝行ハ徳の源なり人の教へを生ず

所よりぞに復りて承たまはる吾れ女ト小語聞え

身體髮膚受之父母不敢毀傷孝之始

也

柳その身體、髮膚まで父母より賜りたる者、これハ傷つけ毀ぶること、故に孝行の始めなりとぞ、身體を以て、身と想ふより、河出小のぞ、或ハ樹木へのかり方、一僕つけ毀ぶふと、何れハおつ小不孝ありつ、一む



史進全身に九ツ乃  
 誰を入墨を



立身行道揚名於後世以

顯父母孝之終也身の品行窮

夫孝始於事親中於事君

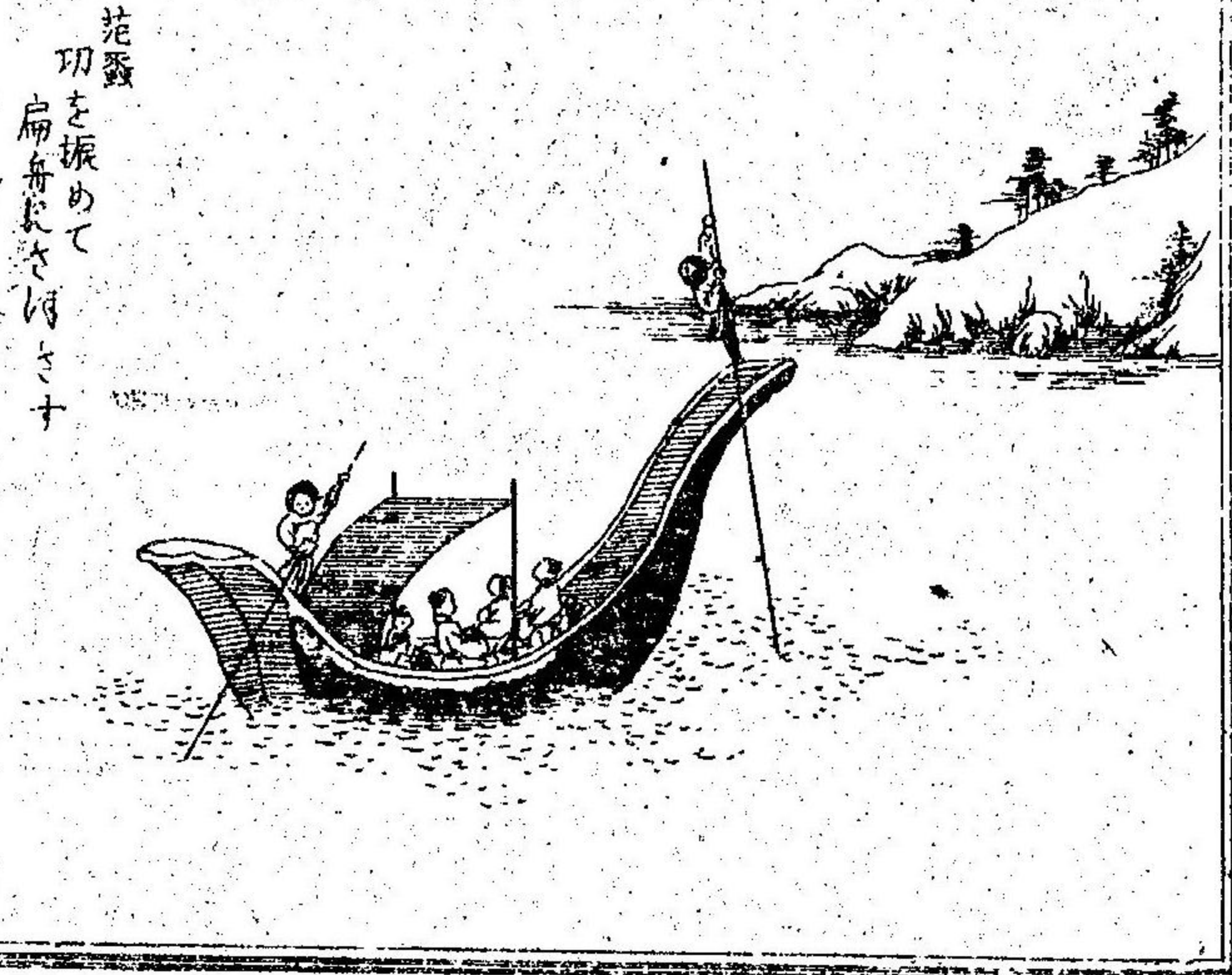
終於立身夫れ孝ハ幼雅より親事

又德行を施したるもふやうにとふり **大雅**

云亡念爾祖聿脩其德詩經

雅の篇小出たり此言意ハ爾たち先祖汝念ハさ

天子章第二孝經ハ



范蠡  
 功を振めて  
 扁舟をさへきす



子曰愛親者不敢惡於人

敬親者不敢慢於人

親然後德教加於百姓刑

於四海蓋天子之孝也

呂刑云一

人有慶兆民賴之

諸侯章第三

諸侯一國の大名あり依て我國小て大名の孝道を

小慶徳あれば兆民の幸をひ比皆是

子曰居上不驕高而不危

子曰のたはまてく君子ハ上ニ居ても徳を人にとつ

下を惠む故に高き身も危うからず

制節謹度満而不溢

危所以長守貴也満而不

溢所以長守富也

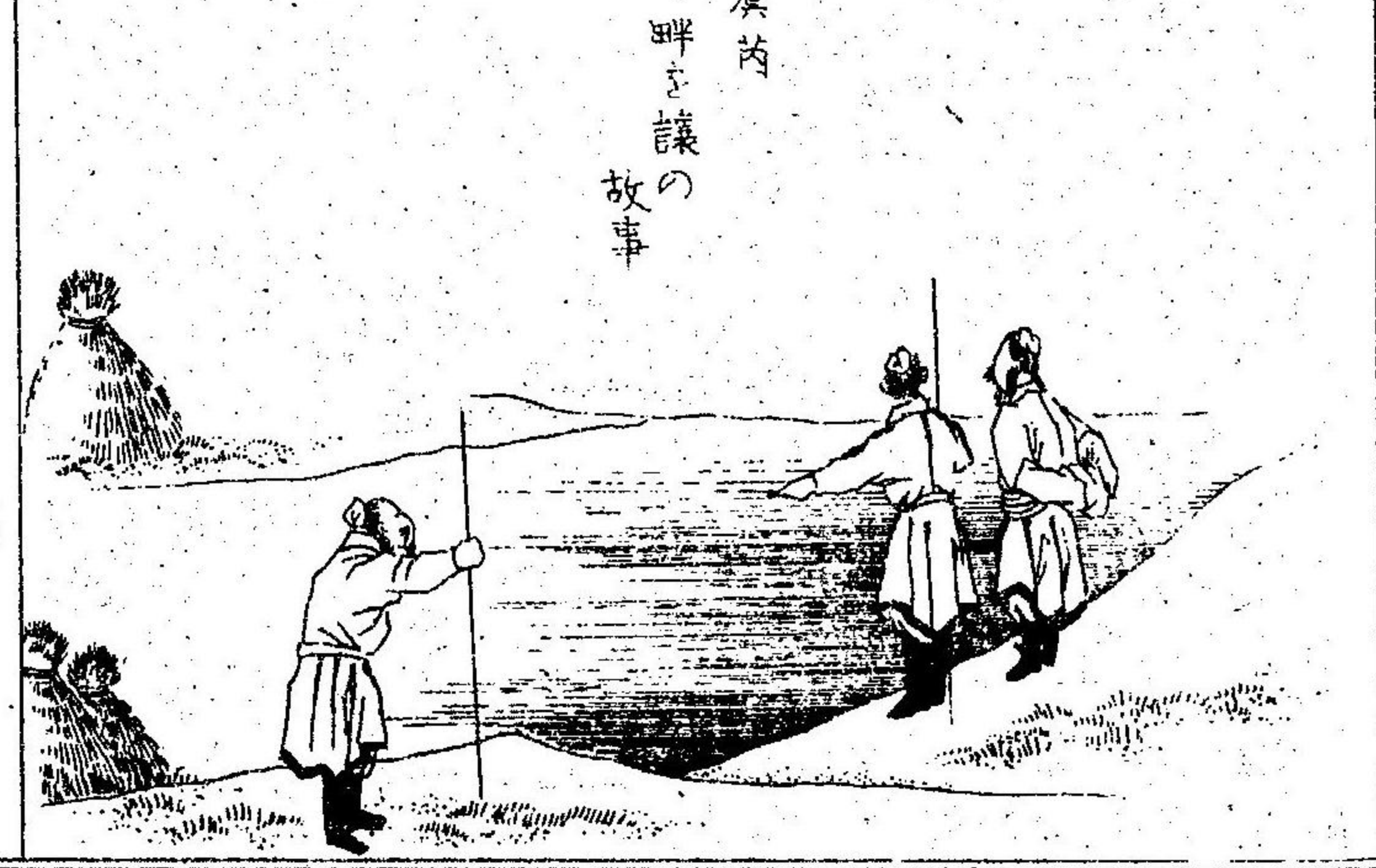
能保其社稷而和其民人

蓋諸侯之孝也

八幡太郎義家  
仁恵によつて降人  
安部宗任心を改め  
誠忠の臣となり



虞尚  
畔を讓の  
故事





術の堅固なればなり故に社稷安全して万民和睦さる蓋し諸候乃幸ひふりと社

とハ土地の神より稷と五穀の神より詩故に領する土地則ち國家を云ふ詩

云戰戰兢兢如臨深淵如

履薄氷 詩經大雅小旻の章云云

云ふ深き淵小臨とまじく薄き氷を履むか

如し明君ハ常に仁恵のときざるを憂ひ

その徳の届くざるを恐るること此の詩のごとく

卿大夫章第四 卿大夫より大夫ハ

子曰非先王之法服不敢

服 御先代の正したる如く禮儀法式き

非先王之法言不敢道 古語

口ハ禍の本あり故に御先代の定のり

法言にもし非ればあきつて云はざるなり

非先王之德行不敢行 御先

代の徳にもし非れば是故非法

不言非道不行口亡擇言

身亡擇行 口言身行ハ凡て人の教へと

亡口過行滿天下亡怨惡 三者

唯 一 神 道



梶原景時運を  
兩端に計り石橋山に  
頼朝をたすけしに





備矣然後能保其祿位而

守其宗廟蓋卿大夫之孝

也前のことノ言語衣服行狀等三ツのそ  
なせる徳はれ先祖の廟堂を守りて

詩云夙夜匪懈以事

一人此詩の意ハ朝夕道小背々を以て忠と  
義とを尽し一人に事ふるを旨とし

士章第五士たる身事小の  
孝とのふる章

子曰資於事父以事母其

愛同父に事ふるに尊敬を第一小を以て  
母も親ふれば其愛ひ父とをふ

然れハ父同やうに資於事父以事

七福神



大國主の尊

少彦那の命

市杵鳥姬の命

蛭子の命

君其敬同君に仕ふるに礼儀を尽  
むべし又尊敬を怠ら

故母取其

愛而君取其敬兼之者父

也かくのごとぎ故に母の愛と君  
敬とを持つと云ふべきものなり故以

孝事君則忠故に親に孝ふる人ハ君  
にも忠を尽はしむ

以弟事長則順兄に順ふを弟と云  
ふ其道を以て長者

忠順不失以事其

上然後能保其爵祿而守

其祭祀蓋士之孝也忠と順と  
の心を亡



平の清盛  
兵庫の築島のために  
人柱を入んとて關を  
すへてつより猿人を捕  
ふ人恐れ鬼時と称せ  
しとぞ



さま上に事ふる人ハ其位ひを祿とを保ちて先  
祖のまつりをよくいたはんとおふり

詩云夙興夜寐亡忝爾所

生 人々朝いやく起き其身の家業をいよく  
を第一とに然して身分身生ト給ひ

人々恥さのこも  
へこのとらにとく

庶人章第六 平人の孝道をいふ  
ふり

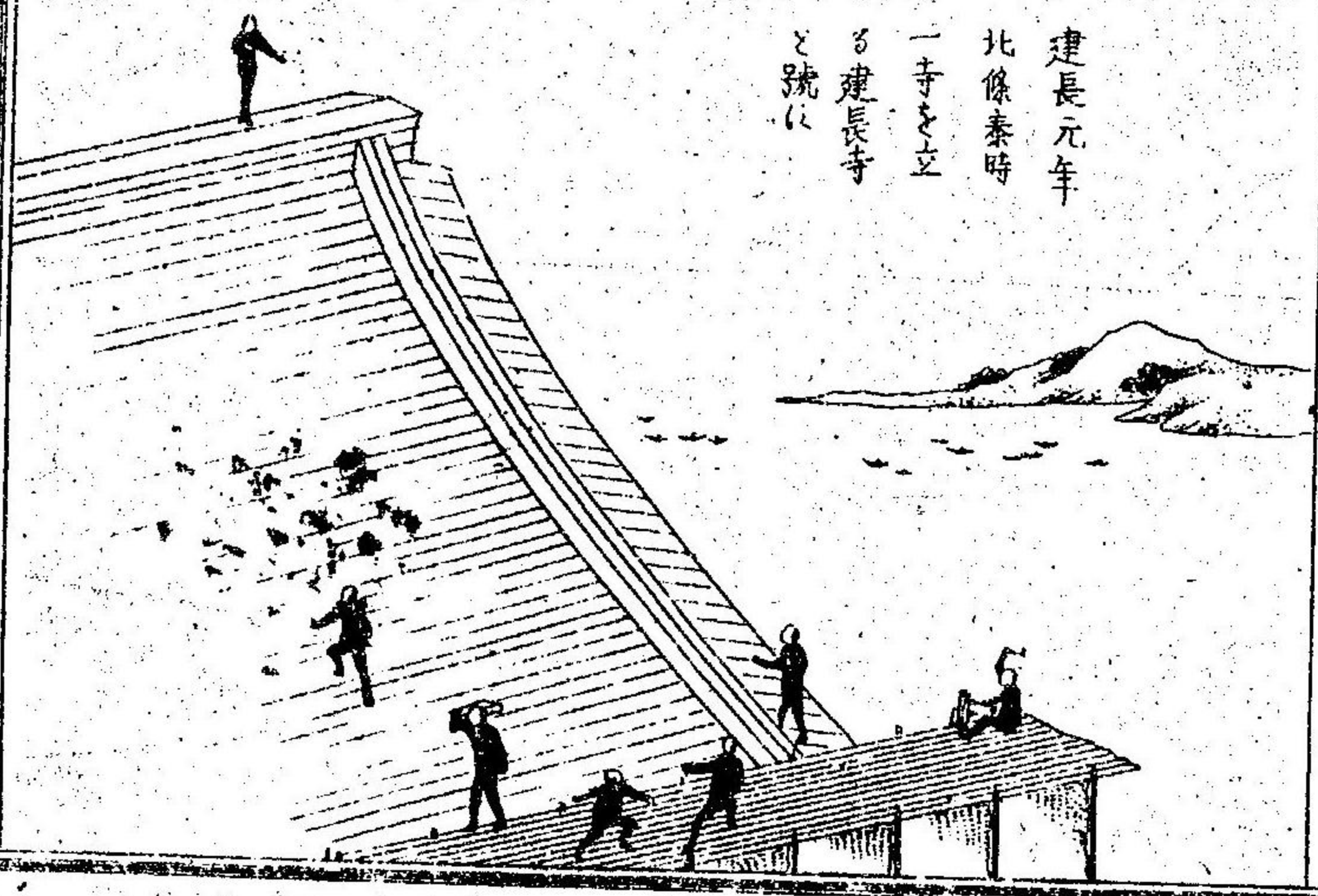
子曰因天之时 天下の農民ハ四季  
の時候に違はれ其

農度を勤むるを第一とて諸職人工藝人工商賣ハ  
その時にあはり

就地之利 水はあひのよき田にハ稻を種へ  
又乾ききる地にハ畑とふり野

菜をつくり又山林に木きる等その時せつ違は  
ぬ云ふふり

建長元年  
北條泰時  
一寺を立  
る建長寺  
と號に



謹身節用以養父母此庶

人之孝也 斯のごとくをつめ後約  
おいと親を大せつ小養ふ

もの茂皆孝  
うと云ふふり

孝平章第七 上より下まで孝道を  
平しくすとすといふ章ふり

子曰故自天子以下至於

庶人孝亡終始而患不及

者未之有也 上天子より下万民小  
るまで子たるものハ

親に孝をつゝ父たるものハ子ハ愛すべし始  
終よくせされば咎あり患ひ身に及ぶべし

三才章第八 孝道を三才に説給ふ  
則ち天地人あり

漢の董永ハ  
父につらへて  
孝く  
天の恵によ  
つて緋三百匹  
を得たりとか





曾子曰甚哉孝之大也

子曰夫孝天之經也

地之誼也民之行也

天地之經而民是則之

夫假

則天

之明因地之利以訓天下

則天

之明



人道高時積德  
九代にして  
是に成るに

天の明なるを奉戴地の徳を惠むと素より仁を以て民に利益を施す

是以其教不肅而成其政

不嚴而治

先王見教之可以化

民

博愛而民莫遺其親

陳之以德誼而民興行

先之

正しく善志とあり



橘の知計  
未とあつて  
馬目を浴に



以敬讓而民不爭又人を敬ま  
人に譲るの

道之道をつく以徳を尊とむ之小より道之これをつくりし以て民の交はり争ふこととす道之道をつく以徳を尊とむ之小より

禮樂而民和睦之れを教ふる小し  
の正しきを樂の和

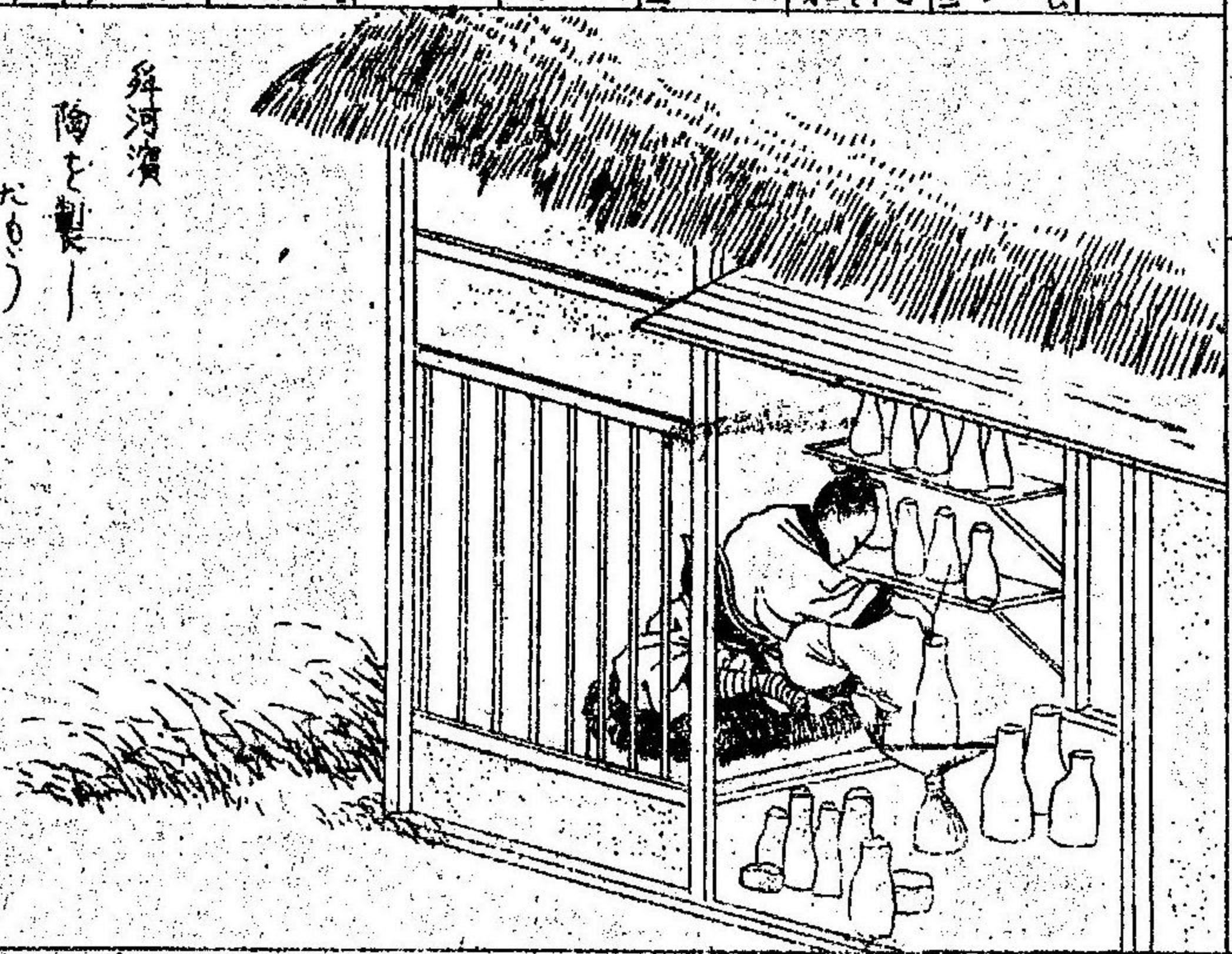
示之以示はしむる示之以示はしむる

好惡而民知禁人におしへ示はし  
好惡の法とて好き

人への恩賞を以て人への悪しき人への刑罰を施  
すこの故に人禁制を守りて悪心なくと

詩云赫赫師尹民具爾瞻詩經小雅節南山の篇赫赫あり赫々い盛人なること  
と凡そ上に立つ人ハ万民の望み善惡に拘り

下の善め毀れを受く師ハ大師を云ふ古  
へ尹氏と云ふもの其政勢の悪しきによつ



舜河濱  
陶を製す  
たり

て人々怨む

孝治章第九孝道を以て世を治さ  
むるを述ぶ

子曰昔者明王之以孝治

天下也明王といはれて先代の聖王を  
云ふ明君ハ左のごとく孝道を

以て天下を治むるとなり不敢遺小國之臣

而況於公侯伯子男乎君ハ

大小名の臣よりとわらわたり捨てば大名を服  
せしめ賞罰を明らんに公侯伯子男ハ諸大

名の位ひより公の次ハ侯その次ハ伯その次ハ  
子其つぎハ男と何れも國のりやうしよぶ

故得萬國之歡心以事其



前漢の丞相  
丙吉牛の喘ぐを患ふ



先王

明王天下を治むるに愛敬を以てに故に万国君臣ありかくの如きことを知

りてこれを以て先祖の祭

治國者不

敢侮於鰥寡而況於士民

乎鰥やもを寡やもめ此の宛民を侮を

愛にるの故得百姓之歡心

以事其先君先君の如き由へに百姓

敢失於臣妾之心而況於

妻子乎故得人之歡心以

事其親家を治むるハ其是非を正

妻と子とハ貴と親と其の賤き臣

妾たも侮と況んや妻子と故に家

内中の喜しひを得てよく其

親につうるとい申になり

夫然故

生則親安之祭則鬼享之

是以天下和平災害

不生禍亂不作うくの如くまると

故明王之以孝治天下也

新田の四天王の

其一人

栗生左門

親賢



天竜川を渡に味方の兵水にねるがゆついで敵城へ

投げ入るに其兵すくさまいちばんのりと名乗る





如此明王の政事を取り扱 詩云有

覺德行四國順之詩經大雅蕩

直いあり斯の如く徳を絶一行ひを致せ

聖治章第十聖人天下を治め給り

曾子曰敢問聖人之徳亡

以加於孝乎曾子は問ひ給ふ聖

子曰天地之性人為

貴人之行莫大於孝孔子曰

とハ氣一つを云ふなり其の性の中にて人をた

孝莫大於嚴父嚴父莫大

於配天則周公其人也孝

尊とむより大いなるハな配に合はる義

昔者周公郊

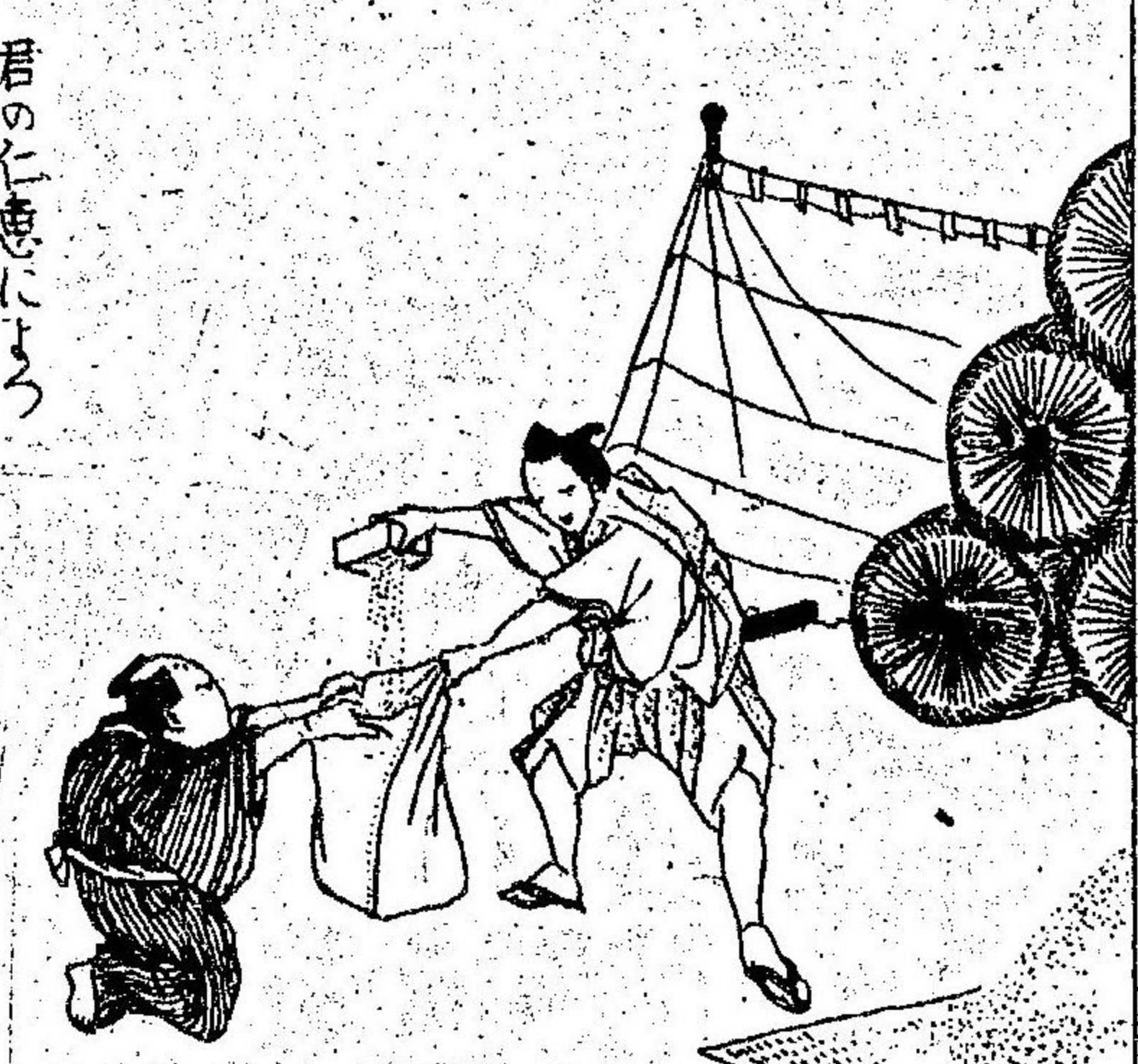
祀后稷以配天郊祀ハ郊原に出

と至春とに天を祭るを云ふこと一周公

宗祀文王於明堂以配上

帝明堂ハ天子の礼堂をいふ上帝り天の神

是以四海之内各



君の仁恵によつて  
寡寡孤獨を撫  
育なり給ふ



梯や命は  
かゝるも  
善くも

芭蕉翁



以其職來助祭夫聖人之

德又何以加於孝乎孝の徳

道のことに示したる故に天下の其の徳義に帰服して各々その職を持ち来り天子の祭

りきたるにけ聖人の御徳にて孝是故親

生疏之以養父母日嚴統

ると云ふ義なり此の世に父母その子を育む

敬因親以教愛聖人の教の嚴重小に

るは教道を教むる

聖人之教親しきによつて愛の道

不肅而成其政不嚴而治

其所因者本也聖人のむし一戒

の政りことさしつかまつりて治まること是

父母生績章第十一父母の育

子曰父子之道天性也父子

ハ天性なり父い子といつて子ハ君臣

之誼也君の臣をいひるハ父の子を

君臣の誼ハ此より始まる父母生之

績莫大焉君親臨之厚莫



源頼朝公

由井濱ニテ  
一千鶴ヲ  
放ス



後三條院

月毎に  
止丰を

拜給ふ



重焉

父母の子を育つるの恩慈愛の甚なり子に於てその功實に

これより大いなるは主君の親愛の恩を以て下に臨む庶民を子とて思む其恩の高きことこれより大なるは

孝優劣章第十二

孝道に優り劣りあるを云

子曰不愛其親而愛他人

者謂之悖德不敬其親而

敬他人者謂之悖禮

以訓則昏民亡則

斯の如く悖

不宅於善而皆在於凶徳

雖得志君子弗從也

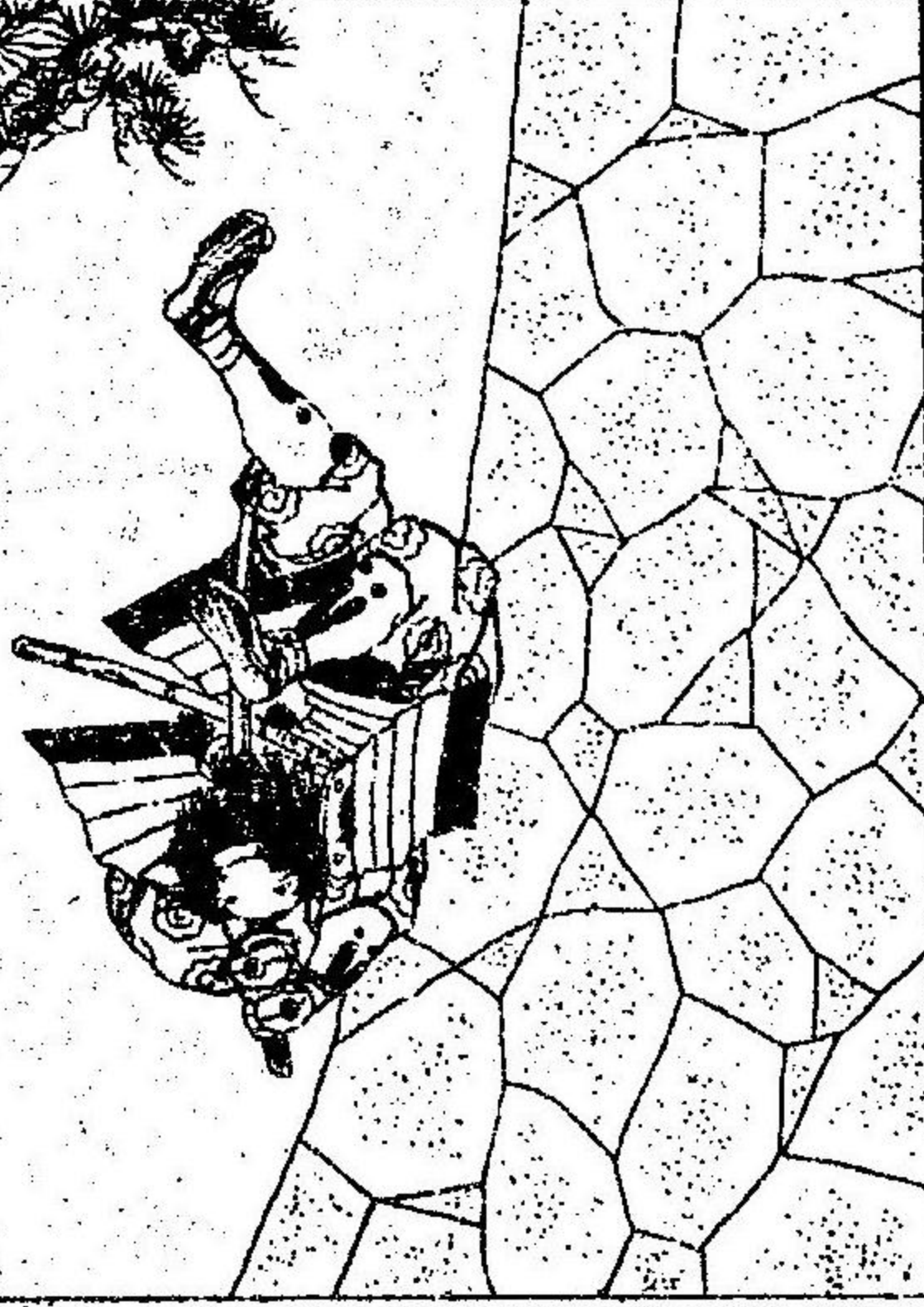
君子則不然

言思可道行

思可樂

礼の法にかなひや否やを思考して

人行ひ必すに遂ぐの如くなれ



加茂の次良義綱の長男義弘父を諫て甲賀山の巖壁より墜に落て死に



保元の皮軍鳥朝強



よろこひ故に樂 **徳誼可尊作事**

可法 徳義を行なふて先代の爲されし道にそむらひ故に尊とふ可し作事

容止可觀 進退可度 君子の容止

以臨其民 是以其民畏而

愛之則而象之 民に向ふ時其

故能成其徳教而行其政

其の整齊嚴衆なるに恐れ且つ其温厚なるになつて故に君道とふるものなり



令前 のことく徳を積む教をりつ

詩云淑人君子其儀不忒

詩經風篇中にある詞なり善人君子自ら威儀に背らば故に人の法に則

紀孝行章第十三 孝行を紀する章なり

子曰孝子之事親也 孔子の

居則致其 子の親に事ふるといふ左

敬養則致其樂 孝子たるもの我

るべきこと行要と父母につらうるを悦ぶを樂しむこと常に敬養をばさる衣食起





居奉養に樂しむを不孝  
疾則致其

憂 孝子に父母の疾あるとき其  
喪則 心憂ひつるなり一かなむととなり

致其哀 親すでに没して其悲痛をきか  
り其の貴歛埋葬を慎しむ人を

祭則致其嚴 して真に感せしむ  
三年の妻かゝりてこれを祭るにも  
父母の在るが如く崇敬を致さなり

者備矣然後能事其親 前  
る五つもの能くする者を

事親者居 孝の全きものといふなり

上不驕爲下不亂在醜不 争

争 争上になつてたふふることなり下に居て法  
争下になつてたふふることなり

居上而驕則亡爲下

而亂則刑在醜而争則兵

此三者 此三者 此三者

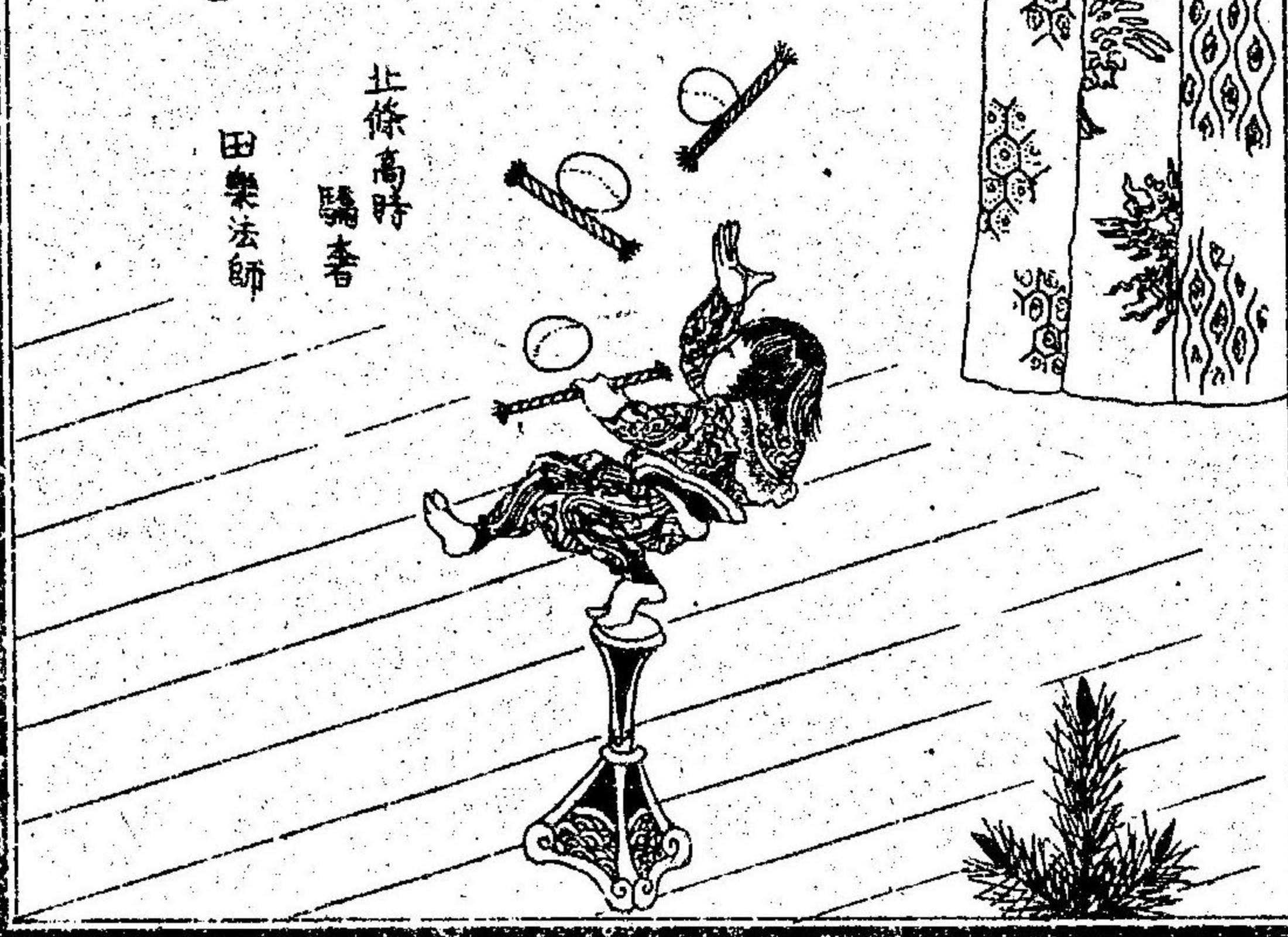
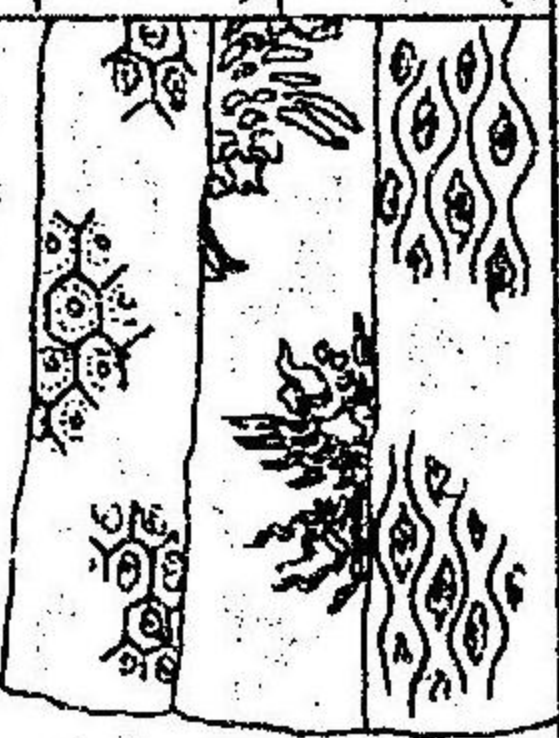
不除雖日用三牲之養

爲不孝也 此の三つの病を除くが  
れハ珍味美味の養ひは

孝といふ

五刑章第十四 五つの刑罰をい

子曰五刑之屬三而卒



止條高時

驕奢

田樂法師



行者武松

行者の像となり面の墨を  
をかく一蜈蚣黄に賊を  
刺る



莫大於不孝

五刑ハ墨劓刑宮大辟ナリ墨トハいたひたい

いれとくをなげ刺とい鼻をそぐ刑とい足の筋をきり宮とい男子ハ勢をきり婦人ハ

亡上

臣として君にむつものき度を云ひ

非聖人者亡法

又聖人の

孝道をそへるものハ親を

親孝道をそへるものハ親を

之道也

下大乱ナリ

廣要道章第十五

孝親禮樂愛敬の道

子曰教民親愛莫善於孝

教民禮順莫善於弟

移風易俗莫善於

樂

和氣の清麻呂

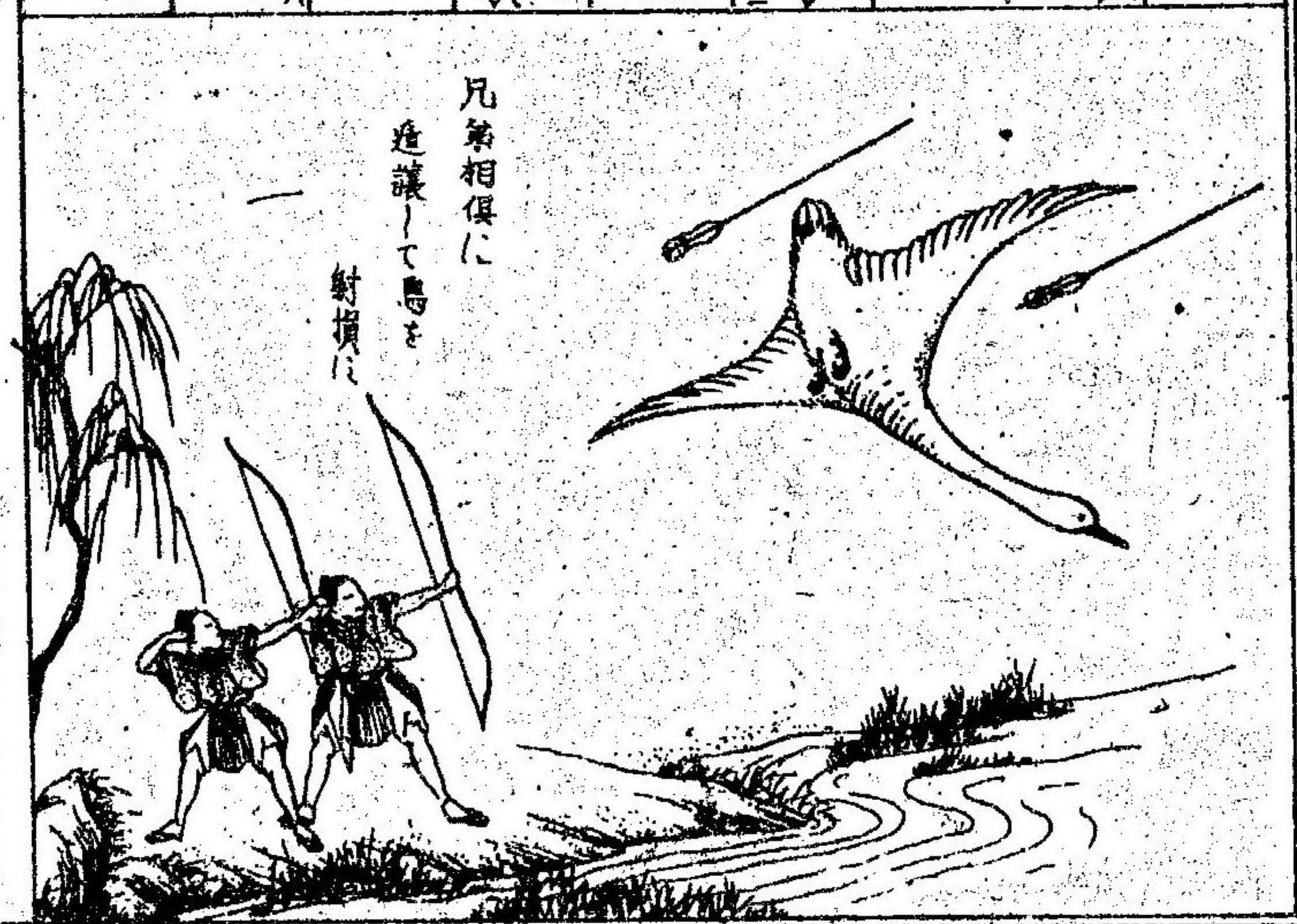
宇佐八幡の神託を偽りて  
罪科によつて道鏡が爲に五  
體の筋を断ち大隅の國へ  
逐流せしむ



凡弟相俱に

進譲して馬を

射損に





人の用ひし樂音なり音曲なるがゆへに人々面白くならずひてお平へに善と  
しにまもむき進むがゆ **安上治民莫**  
へまうとせ

**善於禮** 上を安穩にして人民よく治ま  
るものいれに越ゆるものなり

礼とは尊卑高下の品定まり分限を  
しりてみんりに整外を棄てしむる

此の(心)も(心)は(心)者敬而已矣(心)  
りて新ふまは(心)禮者敬而已矣(心)

一もと云ふ心なり礼い入を(心)や(心)の外  
なりよつて敬に(心)ま(心)といふ(心)なり

**故敬其父則子說敬其兄**

則弟說敬其君則臣說(心)  
其父たる者も敬するときい其子たるもの  
の心說ふにた(心)其兄を(心)や(心)の弟

よろこひその君を(心)や(心)其(心)一人  
の(心)よろこひにた(心)と(心)なり **敬一人**

**而千萬人說** (心)一人(心)も(心)時(心)十  
こふたとへ一人にて(心)なく(心)其(心)臣(心)

を(心)得(心)る **所敬者寡而說者衆**

う(心)ま(心)所(心)す(心)て **此之謂要**

よろこぶもの甚だ(心)なり **此之謂要**

道(心)筋(心)の(心)場(心)に(心)く(心)ると(心)の(心)意(心)を(心)要(心)と(心)云(心)

**廣至德章第十六** (心)君子(心)の(心)至(心)德(心)

**子曰君子之教以孝也非**

**家至而日見之也** (心)孔子(心)の(心)たま(心)  
いける(心)先(心)

首陽山中

伯夷

叔齊



漢の張良

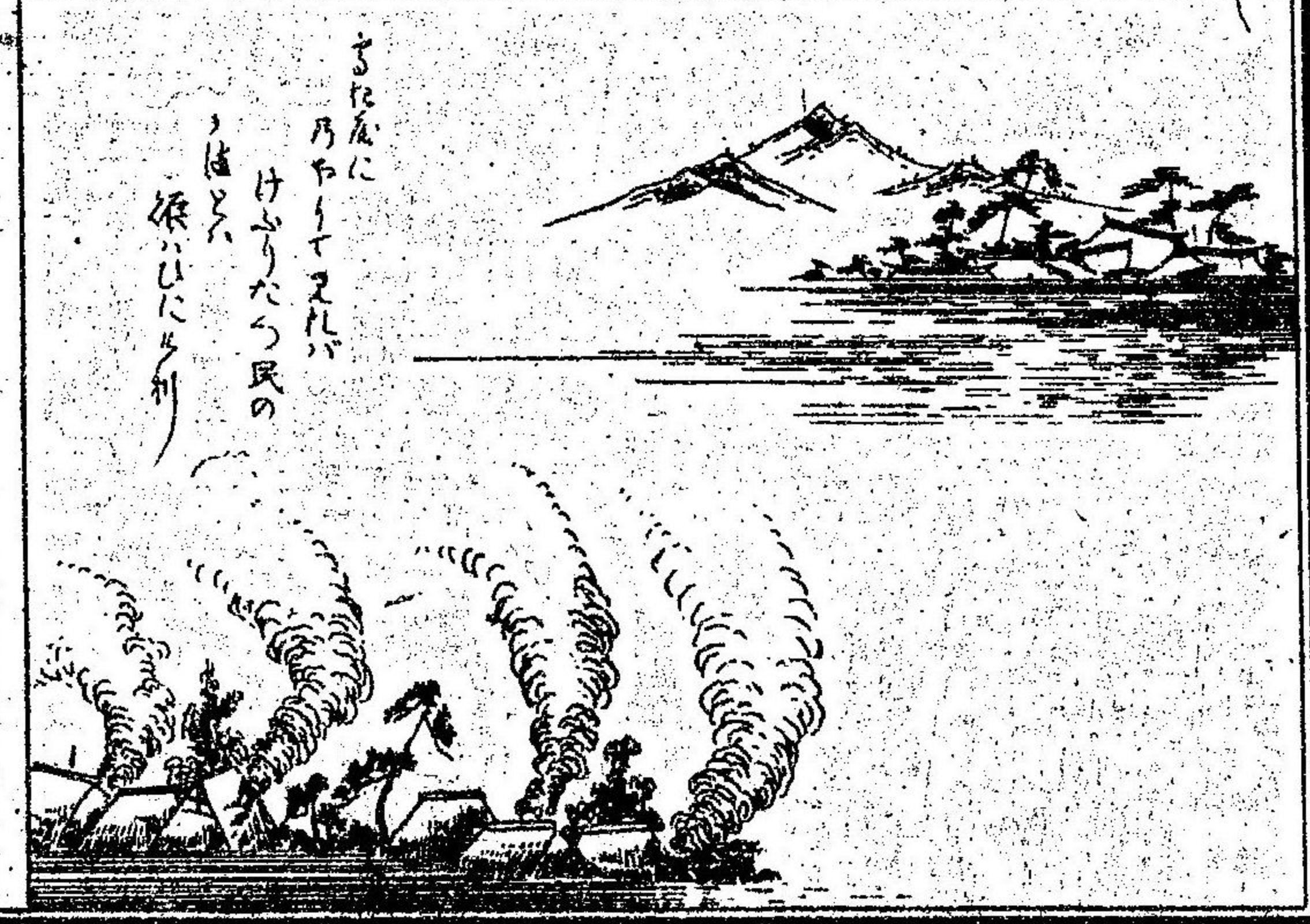




王の孝をもつて天下の民を安んずる由必ずに家  
 々に行きいそりて日々見し説にいその一だ  
 次に述へ 教以孝所以敬天下  
 之為人父者也 前に説たるか  
 ことく先代の立  
 て教へることく天下の父たるものをうま  
 所以をいしこれ 千万人説ふの意なり  
 教以弟所以敬天下之為  
 人兄者也 弟順の教元を立ちて天  
 下の人その礼を敬する  
 教以臣所以敬天下之為  
 人君者也 臣たるの道を立たまい天  
 下の人その君を敬する  
 へんをいし 詩云愷悌君子民之  
 有たり



父母 詩に詩紅大雅篇中の 詞よりくの  
 ことくあれ人民の君子をいし  
 思ふなり君子の老をたつとびて幼を慮く  
 忠愛の心なるむへに父母のことく 由へに  
 詩をもつてこれを 非至徳其孰  
 能訓民如此其大者乎の如  
 く上より徳をもつて徳なき人民り又その  
 徳に化してなつてなり斯れことく廣大を  
 行なひ易くと思へるなり  
 應感章第十七 物にふく感はる  
 とき自然とれ  
 子日昔者明王事父孝故





事天明事母孝故事地察

昔の明王ハ父母につくふること孝の至極  
道をつくすたふふ之れによつて天地につくふ

こと明察なり父ハ長幼順故上  
天なり母ハ地なり

下治先王躬順の道を去るまい年長な  
るものいこれを制たす幼け少ハ

これを順和九族むつまじく治せむれ  
故に上下人民もこれに化してよく治まり

天地明察鬼神章矣

天地につくする真誠の道をつくす事  
を明かにする由に神の感應は國も

かに年ハ禍さす故雖天子必有  
尊也言有父也必有先也

言有兄也必有長也

言有父也必有先也

言有兄也必有長也

言有父也必有先也

言有兄也必有長也

言有父也必有先也

言有兄也必有長也

言有父也必有先也

言有兄也必有長也

言有父也必有先也



神切皇后  
三韓  
吳洛

向奴屈伏  
して羣衆に



吳王をいさめて  
伍子胥兩眼を  
抉出して東門  
にかけんといふ



亡所不暨 其の道をつくすのへに神明にま

東自西自南自北亡思不 言云自

服 武王の孝心の徳天下に聞へ人民服せざる所なき

廣揚名章第十八 孝道廣く名

子曰君子事親孝故忠可 移於君

弟故順可移於長 家

居家 一子資政討死

理故治可移於官 家事をま

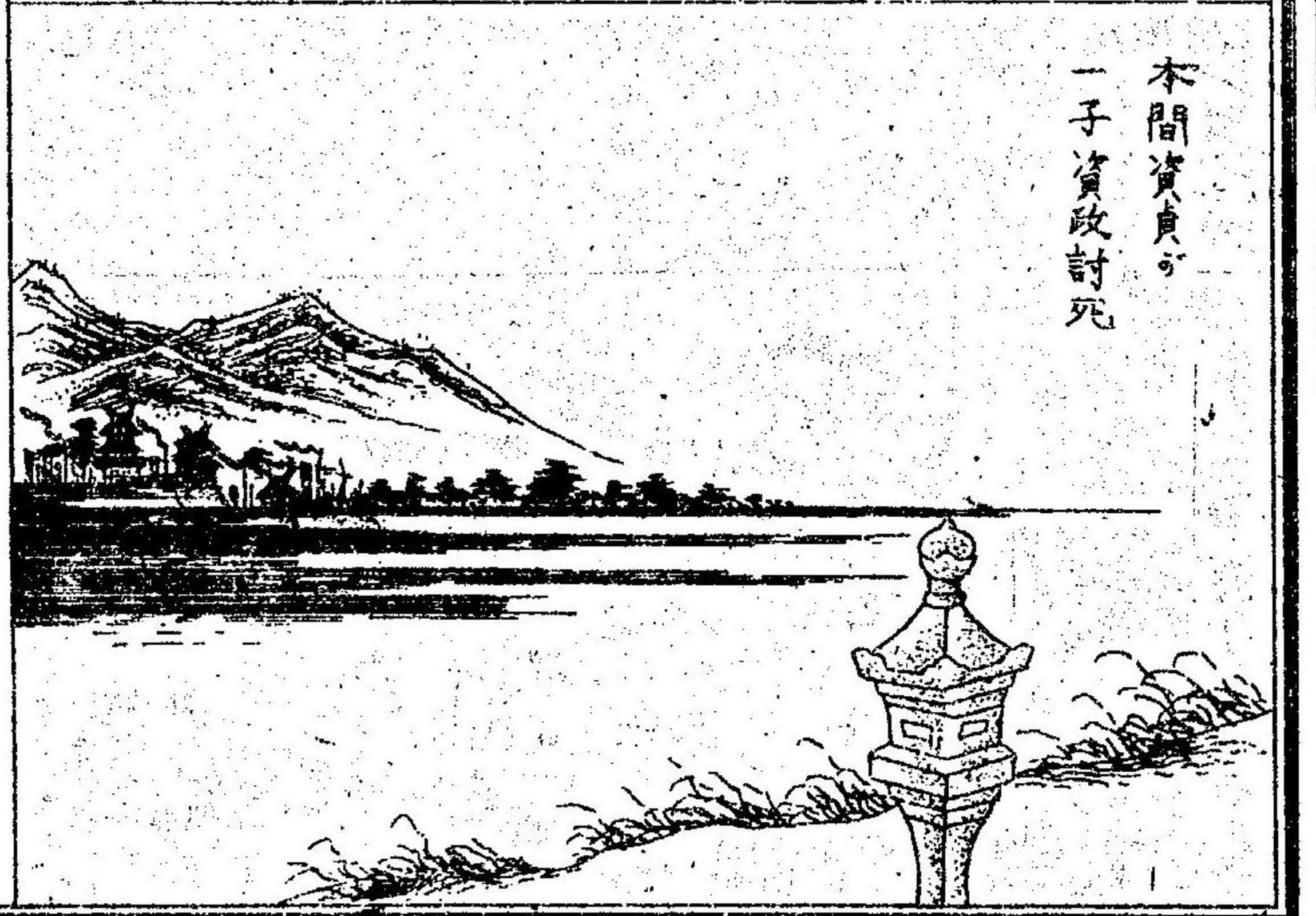
於内而名立於後世矣 所の

閨門章第十九 閨門ハ小き門カ

子曰閨門之内具禮矣乎



一子資政討死



本間資貞が  
一子資政討死



孔子のくまなく礼は家内に具  
はり後民に及ぶべきなり 嚴親嚴

凡 親につらうるを第一最重つらへ 妻

子臣妾絲百性徒役也 次

子(子)より臣(臣)僕(僕)妾(妾)へと次第にめぐら  
民をいさめて治めて徒役(徒役)に召使ふことくなる

〜

諫争章第二十 諫めるも争ふも時  
に依てい孝とせざる

曾子曰若夫慈愛龔敬安

親揚名參聞命矣敢問子

從父之命可謂孝乎 曾子乃

愛の道親をいんとにまゐること又名をらげ孝  
の終とての教へを嘗て受けし父の命

令するところを何変にても(たう)を  
もつて孝とせざることをいさして問ふ

子曰參是何言與是何言

與言之不通邪 孔子戒めて曰く

〜父の非(非)をことにてりすくこれに  
従ひ父を不義(不義)にもといるとい不孝(不孝)せ

んはんなり何由へに理を推致めずして言  
ふことの通(通)せざるやとなり

昔者天子有争臣七人雖

亡道不失天下 他(他)の(大)師(大)傳

大保(大保)前疑(前疑)後患(後患)左輔(左輔)右弼(右弼)等天子  
側(側)にけりて天子非(非)るときはそれを諫(諫)正(正)



平重盛  
父清盛を諫む



ざるの官なり天子道をうしなすといへども  
 よく諫めたりたもへば天下安穩なり若く  
 いきめに従ふれば其国亦ろふ天子に  
 の七人の臣たりんば大凡非道のことあると  
 も天子を亡失度にいとくに  
 諸候

**有争臣五人雖亡道不失**

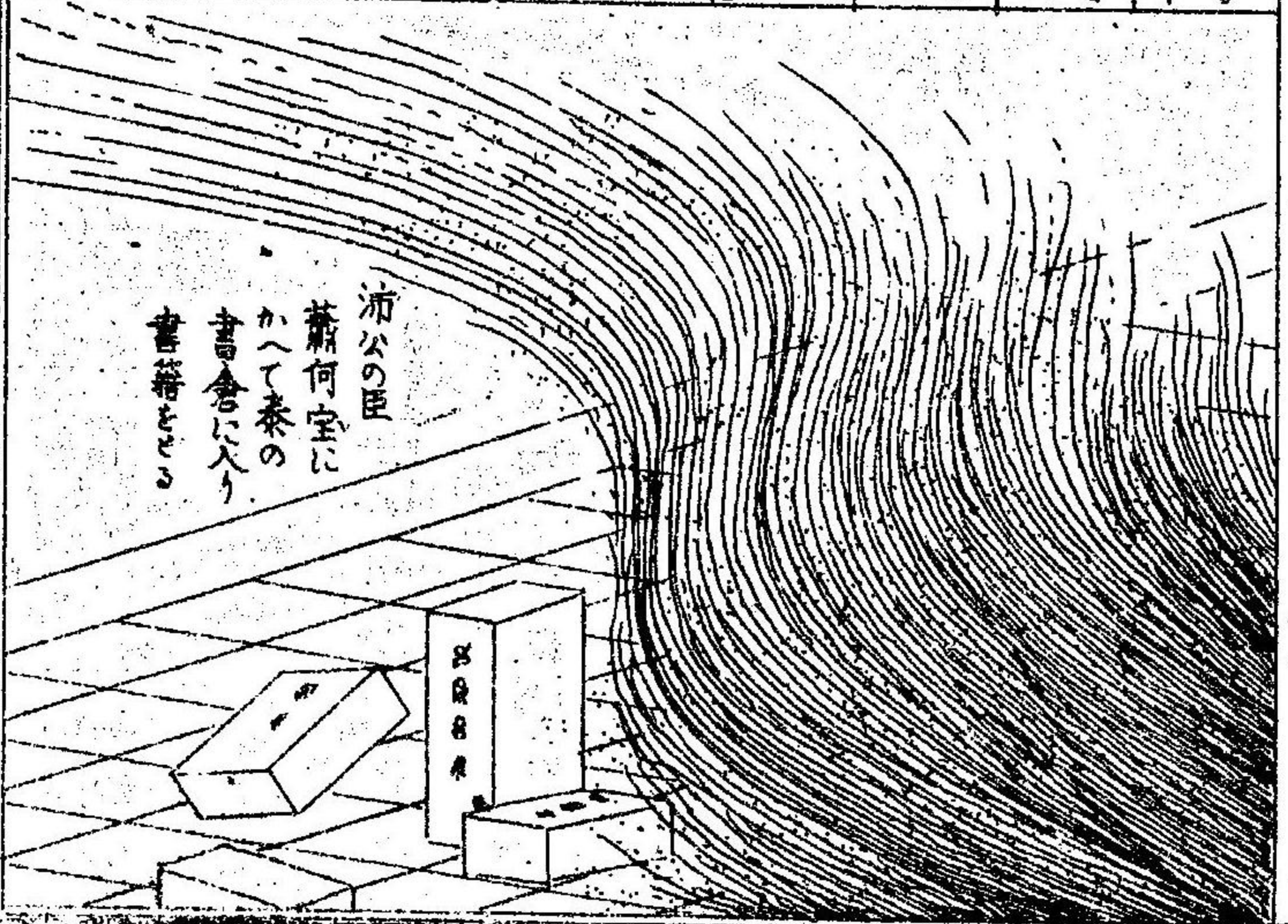
**其國** 候伯に諫め臣五人ありときハ前  
 國をうしなすは其の五人ハ

**大夫有**

**争臣三人雖亡道不失其**

**家** 大夫に諫め臣三人ありんば大夫道を亡  
 ぶといへども此三人の諫めにより

大夫有  
 相宗老側室を云ふなり



**友則身不離於今名**

信を守り善を責むるの人ありて其の人  
 我身の過失亡道を諫さむるとき我身

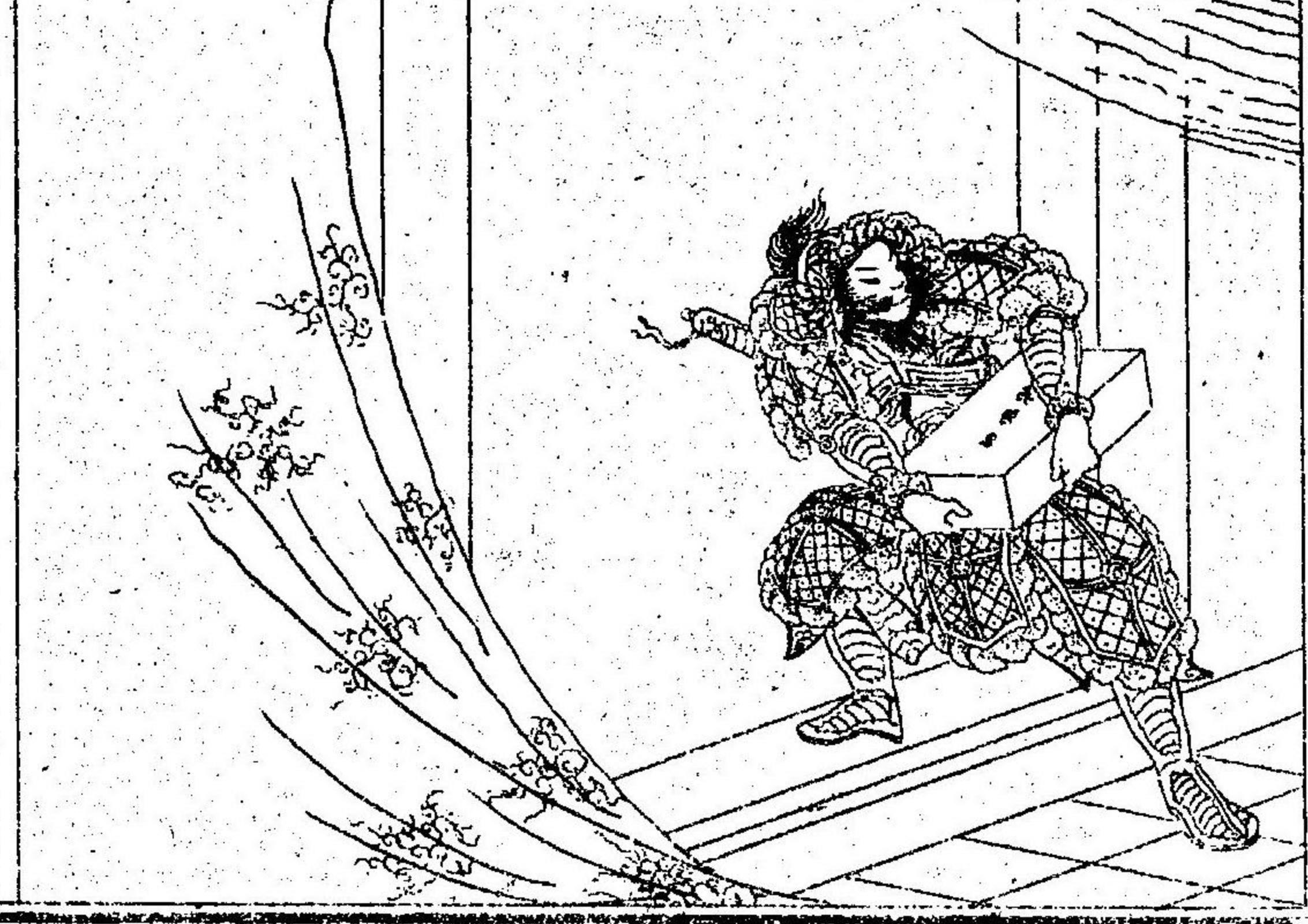
父有

**争子則身不陷於不誼**

孝順をわつて事ふといへどもも  
 色を見てゆるしと諫むべし父も

不孝なり已むことを得に  
 父を捨てて父を捨るにのびざるなり父諫め

**故當不誼**





則子不可以不爭於父臣

不可以不爭於君君に義の

とときハ子たるもの諫めざるべし君の

のしるべきことらとときハ道をもつて諫む

るハ臣の道なれば必ず故當不誼

則爭之從父之命又安得

為孝乎君父の命に背ざるのこを

事君章第二十一忠臣孝子の

子曰君子之事上也進思

盡忠退思補過君子の徳の

君父をいふなり君子の君につづるハ

道をつくはべし又素行へりてハ他事を

君の御身に過失とりおとすこと

これ君子たるもの上につ

匡救其惡君にあらでなすの善

故上下能相親

山地震裂けて

不孝の罪を

四詩



蘓武雪を嚙んで匈奴に降るに白髪に及んでよかれ帰る漢に仕ふ





也 君明らうにして能く諫めを用ひ臣  
忠にしてよくかみりて敬服し上り下

むつまいくくしてのち方民恩沢を  
ふむりともに幸福をうくるものなり 詩云

心乎愛矣遐不謂矣 詩經小  
雅篇中

に臣の心に君を愛せ其身たとへ  
遠方に在といへども遠くとせざるべし 忠

心臧之何日忘之 心中忠に臧  
て君を

思ひたてまつるなくは向  
忘るべきの理なきとと

喪親章第二十二 親の喪に在る  
終をのり

子曰孝子之喪親也哭不  
依禮亡容 孔子云孝子たるもの

を見るになげくこと依めかき礼を齊ふを  
るの心なりこれを礼法の容なきなりとい

ふなり言不文服羨不安聞

樂不樂食旨不甘此哀戚

之情也 孝子の心悲哀にたえに父母

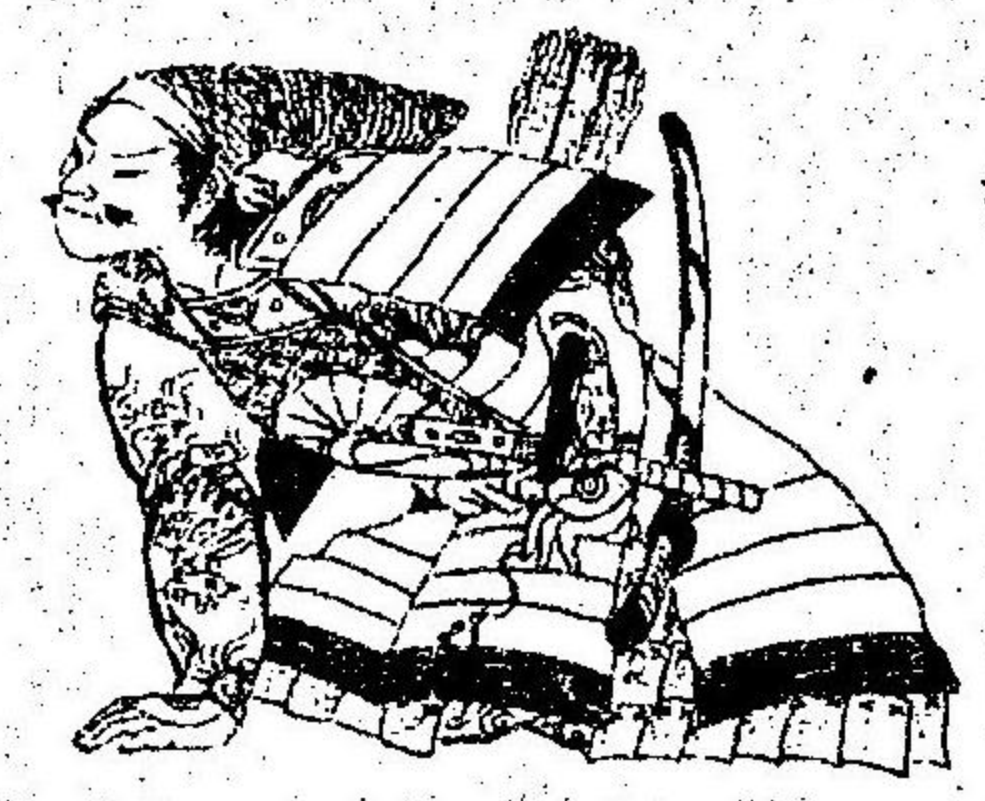
うもへにかくのこととなり言詭ること  
うもへにかくのこととなり言詭ること

樂を聞けども樂しと思はば口に音きり  
いひをふ不へだとなりこれな哀し

とにふりき実情はさかゆへ 三日而

食教民亡以死傷生也 昔

父母死すれば哀戚のらなり食事喉をしす  
こと能はずして人たをとりしどして



楠正成



宰相 清忠



竈をもちふやちりふれによつて鄰人氣  
 をつけて粥などを炊てこれを送くり食  
 せむなり先王制作して子たるもの  
 ハ誠に斯くはるべきことなりと又生を傷害  
 ぶるはも是れまじき事なり其  
 の法を立て給ふて三日の後ハ食事をな  
 べきこと道ちにうなふよ  
**段不滅性**  
 をふへたまひなり

**此聖人之正也**  
父母の哀を

脊体傷をひて性質をめぐつるは至るべ  
 是れまじき事なり其正なき  
 喪制を  
**喪不過三年示民有**

**終也**  
父母の哀戚子たる者にあつて誰れ  
 甲乙をわくべらんや捨ておくときい  
 喪中といつて限りなく

とも聖人之を制して三年人にうきり給ふ

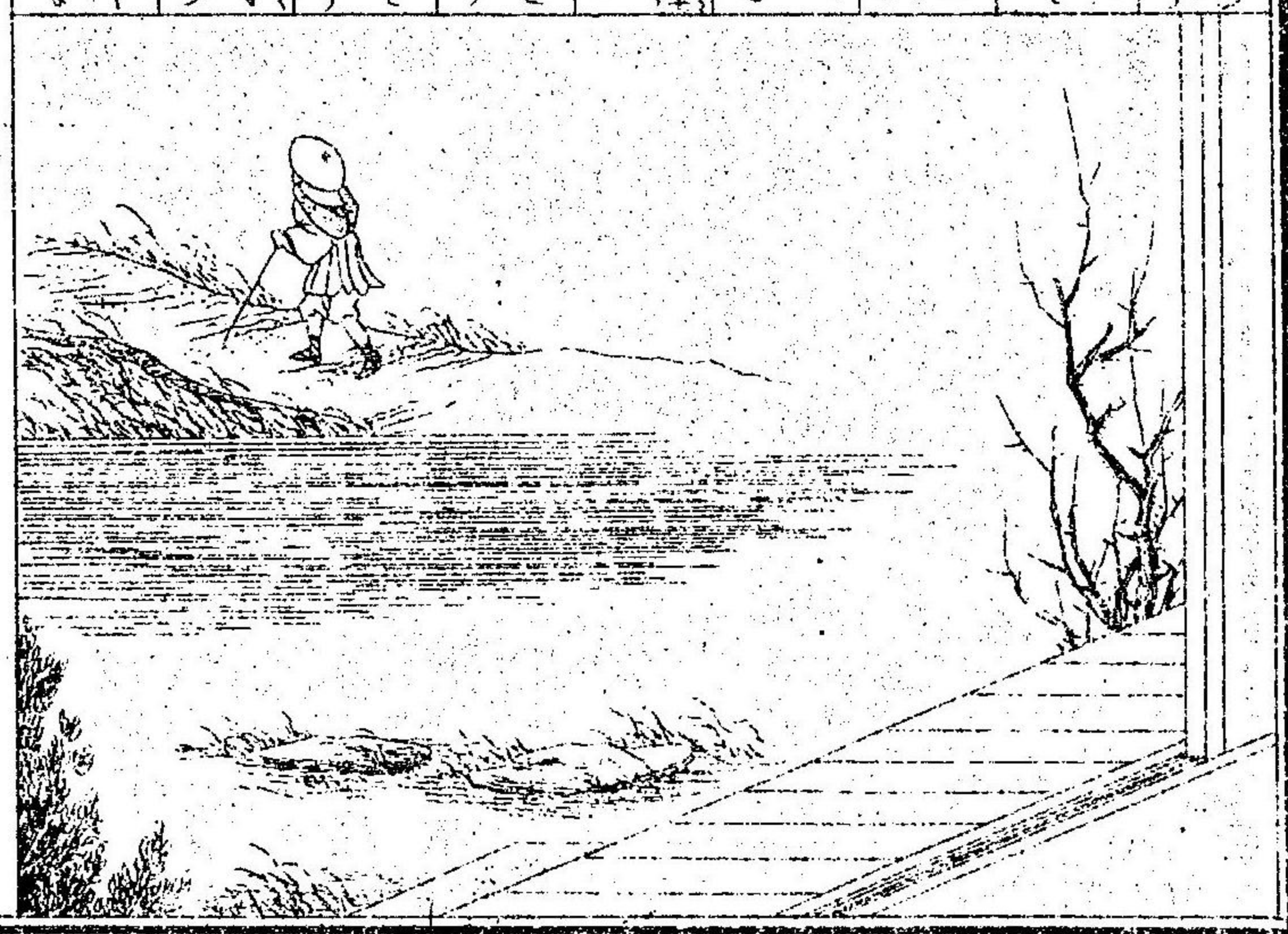
爲之棺槨衣衾以舉之  
此如

礼をいとい棺といつて尸ハ衾を入れるもの  
 又槨といつて棺のうまいを造り又衣とい  
 いて尸にさうするきぬと衾といつ  
 て衣の上をきぬにて縫ひ帯びをつけてこむ  
 うむる而してか衾をさげて尸ハ衾を

**陳其篋篋而哀戚之**  
蓋篋と

**哭泣擗踊哀以送之卜其**

**宅兆而安措之**  
宅とく棺槨を見かく  
 ちとぎの哀のさま



平の貞後の妻女  
 夫の別れを悲  
 しく自言に



を記るせしなり胸を擗ち哀しきなげくなり  
 まし土地をせしと兆しよと宅とをトちなひて  
 其清浄なるところに安んじ定ためて措くことな

為之宗廟以鬼享之春秋

祭祀以時思之

の流るること有りてのちノの禍いどもなるべ  
 きやと志り鬼とい人の死やたるをいふなり三  
 年の喪終はりてそのまに至りて嘗て人ハ御宗  
 の廟堂を建庶人ハ今ノ坐敷の清きところ  
 に神位をもちけて祭りをあはひけり是れ則  
 ち鬼神これをもうけ給りといふなり春秋ハ  
 四季の祭祀にて孝心を父母を思ひたてまつる  
 なり

生事愛敬死事哀戚



外者ノ父母の存生せしときハ愛敬を以てつ  
 う一死去給ふのちに哀戚を思ひてきことなり  
 實に人間の大 生民之本盡矣

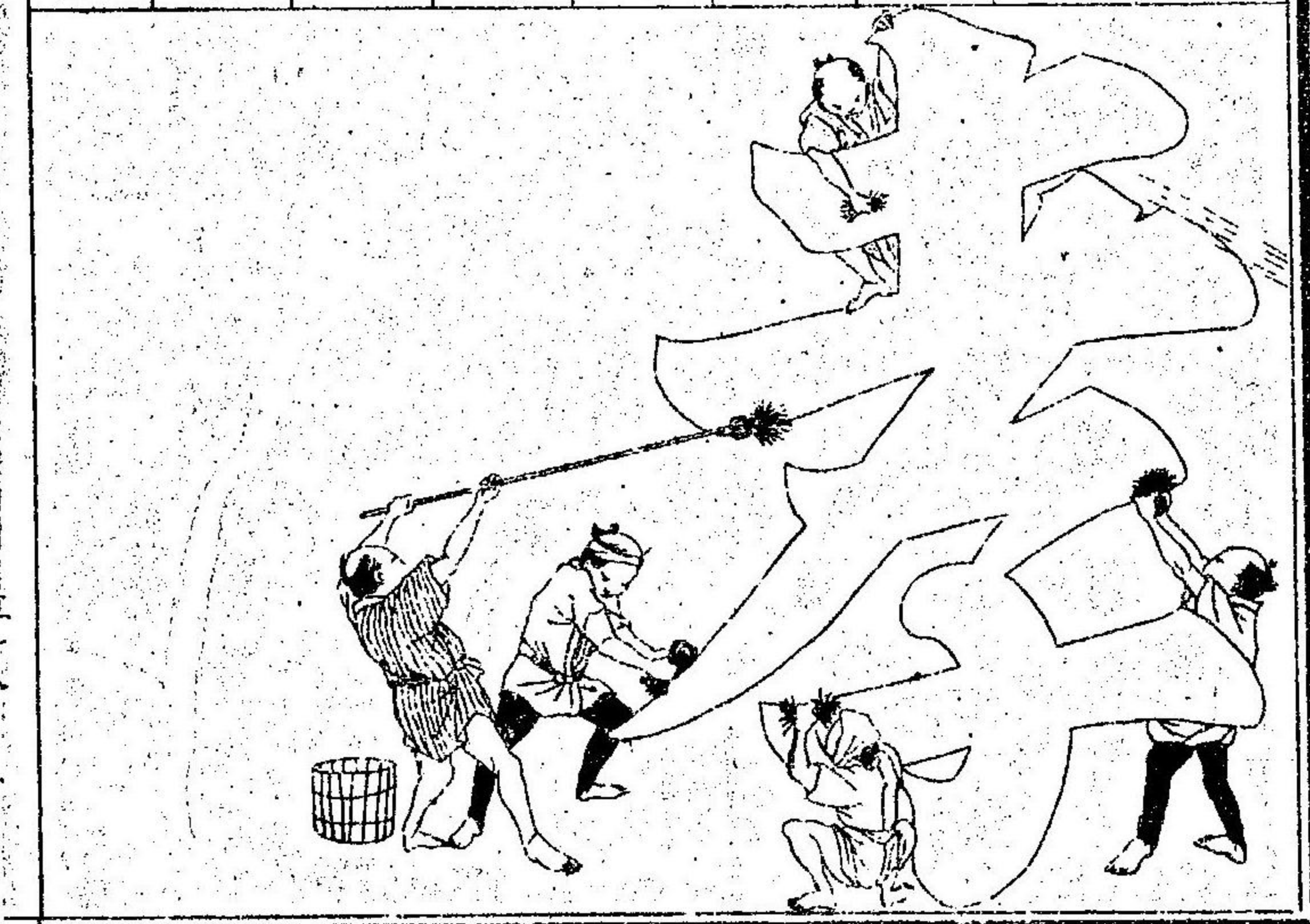
死生之誼備矣

父母存生せしうちハ孝を以て事ふ

孝子之事終矣

人たるものは是非この書を誦すんはつべし

繪本孝經略解 畢





東京府士族

編輯人 堀 中 徹 藏

本所區綠町一丁目四十七番地

全 平民

出版人 大 川 新 吉

日本橋區橋町三丁目十一番地

全 平民

同 近 藤 清 太 郎

本所區石原町廿三番地

定價拾八圓

明治十六年四月十九日御届

同 八 月 出 板



